

アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』に おける英雄イアソンの人物造形と異性愛

——ホメロス『イリアス』『オデュッセイア』とのテキスト比較
からの考察——

矢野愛美*

1 はじめに

英雄叙事詩『アルゴナウティカ』は、紀元前三世紀に学匠詩人アポロニオス・ロディオスによって作られた。彼は『アルゴナウティカ』を創作する際に、ホメロス『イリアス』『オデュッセイア』の言語表現や物語内容を踏まえたうえで、それを模倣、改変し用いることで、独自の叙述を生んでいると考えられる。とりわけ、その叙述により創造された英雄イアソンの人物造形は、ホメロス作品^{*1}とは異なる特色をもつものとして、近代の研究者たちからの注目を集めてきた。

先行研究において、本叙事詩におけるイアソンの人物造形の特色の一つは、女性たちを魅了する美しさと、魅了した女性たちから助けを得ること

* 東京大学人文社会系研究科博士課程（西洋古典学）。

*1 本稿において「ホメロス作品」と記した場合、今日伝わる『イリアス』と『オデュッセイア』のテキストを指す。Pfeiffer (1968: 117) が示すように、アポロニオスの時代においては、『イリアス』と『オデュッセイア』の 2 作品のテキストが共にホメロスという 1 人の詩人によって作られた詩だと考えられていたことから、本稿で比較を行う際、その作者に関しては問題としない。また、『イリアス』『オデュッセイア』の 2 作品のテキストを本稿ではホメロス作品として取り扱い、その他のホメロスの名が冠された作品に関しては、必要に応じて、それを明記した上で言及することとする。以上の方針は、『イリアス』『オデュッセイア』と『アルゴナウティカ』の比較分析を行った先行研究である、Knight (1995: 1-10) に倣ったものである。

にあると指摘された。例えば、1960年に既に Fränkel は、イアソンについて、ホメロス風の粗暴な英雄たちとは異なり「若く美しい姿で、愛想がよく、ゲアテによると『女性たちに好かれる (Frauen angenehm)』^{*2}」と述べている。この側面について特に焦点を当てて論じはじめたのはおそらく Beye であり、彼は異性愛というテーマに着目してイアソンを捉え、love-hero としての彼を論じた^{*3}。Zanker も同様に、イアソンが女性たちからの寵愛を受けていることに着目し、「新たなヒロイズムの基本方針は、伝統的な個人主義の武勇ではなく、人の力を、愛を進んで受け入れ、利用することである^{*4}」と述べた。この女性たちからの助けという側面を重視した論を受けて、Natzel は本叙事詩で女性たちが果たす役割を論じることにより、「新しい真の (英雄的) 理想へと向かう進化は、女性を参加させなくてはならない^{*5}」と指摘している。特に、本叙事詩の第三・四歌においてはメディアに焦点が当てられるため、Margolies はさらに議論を進めて、本叙事詩では本来英雄が果たすべき役割をメディアが担っていると主張した^{*6}。ただし Clauss はメディアが果たす役割はあくまでも助力者だとしている^{*7}。一方で Pietsch は、女性たちを魅了し歓待を受けるという描写は、『オデュッセイア』のオデュッセウスにもあると指摘し、この点でホメロス作品と異なる『アルゴナウティカ』独自の特色を論じることが困難だという考えを示した^{*8}。

*2 Fränkel (1960) 18: 'Er ist von jugendlich schöner Gestalt, er ist liebenswürdig, und (nach Goethe) «Frauen angenehm」.

*3 Beye (1969) 表題: 'Jason as Love-hero', Beye (1982) 94: 'Jason, the new-found heterosexual love hero'.

*4 Zanker (1979) 72: 'The keynote of the new heroism is not traditional individualistic prowess but the willingness to admit to and exploit the power of a more human force, love'.

*5 Natzel (1992) 195: 'd.h. daß eine Evolution auf ein neues, wirkliches Ideal hin die Frauen miteinbeziehen müßte'.

*6 Margolies (1981) 167-202.

*7 Clauss (1997) 177.

*8 Pietsch (1999) 111-2.

以上のことから、イアソンの人物造形をホメロス作品における英雄たちとは異なるものとして捉えられるか否かを論じる際に、イアソンと彼の手助けをする女性たちとの関係性に焦点を当てる必要があることが分かる。本叙事詩において、イアソンに魅了され、冒険の手助けをする女性（女神を除く）として着目する必要があるのは、第一歌に登場するレムノス島のヒュプシピュレと、主に第三・四歌に登場するメデイアである。本稿においては、この二人とイアソンの関わりに焦点を当て、それを描写するために、アポロニオスがホメロス『イリアス』『オデュッセイア』における語彙や表現をどのように用いているのか、またそれがイアソンの人物造形にどのような効果を与えているのかについて論じ、イアソンの人物造形とホメロス作品の英雄たちの人物造形の異なりを検証する。

2 レムノス島のヒュプシピュレ

2.1 イアソンの美しさ

レムノス島におけるエピソードは、I.609-914において語られている。アルゴナウタイが島に到着したのは、かつて島に住んでいた男性たちが女性たちにより殺され、ヒュプシピュレの父であり、かつて王であったトアスは海に逃された後である。そのため戦いや畑作が女性の仕事となり、女性たちはトラキア人の襲来を恐れていた（I.609-39）。この状況下でアルゴ船が英雄たちを乗せて島にやってきたことを知ったヒュプシピュレは、島の女性たちを集めて集会を開き、トラキア人の恐怖から逃れるため、異国の者たちに（*ξείνοισι*^{*9} I.696, アルゴナウタイのこと）、自分達の家、財産、町を取り仕切ることを任せることを決定する（I.653-708）。町に招待されたアルゴナウタイは、イアソンを町に送り出す。

I.721-81においては、イアソンの姿の美しさが繰り返し描写される。まず

*9 以下、邦訳は全て参考文献に挙げた注釈書や邦訳等を参考としながら、筆者が試訳したものである。本稿における『アルゴナウティカ』本文の底本は全て Race (2008) を使用した。

1.725-67 では、イアソンが肩に纏う、アテナからの贈り物である「赤紫色の外套 (δίπλακα πορφυρέην 1.722)」の美しさについて語られている。この箇所は『アルゴナウティカ』において観察できる唯一の「エクフラシス^{*10}」と呼ぶことができる描写であると指摘されており^{*11}、同じく「エクフラシス」として有名な、『イリアス』18.483-608 における、ヘパイストスを作るアキレウスの盾の描写と同様に、アポロニオスは造形芸術（外套の模様）を詳細に描写している。『イリアス』においてエクフラシスは、出陣を決意したアキレウスが戦場に赴く前に、母である女神テティスが送った盾の細工を描写するために用いられている。

『アルゴナウティカ』におけるエクフラシスに関して、Koopman などが『イリアス』におけるエクフラシスとの仔細な比較をおこなっている。曰く、両方の叙事詩において、エクフラシスは英雄が武装する場面の描写の一部を構成している^{*12}ものの、『イリアス』においてアキレウスの盾が戦闘に使用するものであったのに対し、イアソンの外套は戦闘に使用するものではない。ここから、イアソンがこの外套を肩に纏い、少女アタランテから贈られた槍を手に持つ (1.769-73) 姿は、「イリアス的な武装場面を性愛的に書き換えたもの^{*13}」であると理解され得る。

*10 「エクフラシス」とされている部分は、1.730-67 である。ここでは外套の模様について描写されているが、この模様は 7 つの物語の表象で構成されており、いずれも神話から題材を得ている。久保 (1992: 116-48) は、この模様について論じ、7 つの表象は全てアポロニオス以前の叙事詩や悲劇、叙事詩風物語詩の発端場面を想起させるものになっており、並べると古代ギリシア叙事詩の系譜が完成するということを指摘した。

*11 Fränkel (1968) 100-3 on Arg. 725-67, Shapiro (1980) 264.

*12 Koopman (2018: 212): イアソンがこの外套を身につける様を描写する最初の行の前半「αὐτὰρ ὅγ' ἄμφ' ὤμοισι 1.721」は、『イリアス』3.328 においてパリスが武装する様を描写した時に用いた語彙表現と、全く同じ言葉が用いられている。

*13 Koopman (2018) 212: 'an erotic rewriting of an Illdaic arminig scene' 同様の指摘は、古註 [Wendel (1974) 60 on Arg. 1.721-2] において既に述べられており、Clauss (1993: 122-3) および Hunter (1993: 48, 52-3) においても指摘されている。

この外套の色は、「それ（外套）の輝く赤をみることも、昇る太陽を両目で見上げる方がより簡単だろう（τῆς μὲν ῥήτερόν κεν ἐς ἥλιον ἀνιόντα | ὅσσε βάλοις ἢ κεῖνο μεταβλέψειας ἔρευθος. I.725-6）」と語られている。Beyeは、この赤色に関する記述は、ホメロスにおいて英雄たちの武勇を赤く輝く炎と同等とみなしたことを想起させる効果があると指摘する^{*14}。

また、赤く輝くものという比喩は、外套のエクフラシスの後にもみることができる。美しい外套と槍を身につけたことが語られた後、イアソンがレムノスの町へと向かっていく姿は、以下のように描写されている。

βῆ δ' ἵμεναι προτὶ ἄστν, φαεινῶ ἀστέρι ἴσος,
ὄν ῥά τε νηγατέησιν ἐεργόμεναι καλύβησιν
νύμφαι θηήσαντο δόμων ὕπερ ἀντέλλοντα,
καὶ σφισι κυανέοιο δι' ἡέρος ὄμματα θέλγει
καλὸν ἐρευθόμενος, γάννται δέ τε ἡιθέοιο
παρθένος ἰμείρουσα μετ' ἄλλοδαποῖσιν ἐόντος
ἀνδράσιν, ᾧ καὶ μιν μνηστὴν κομέουσι τοκῆες·
τῶ ἵκελος προπόλοιο κατὰ στίβον ἦεν ἥρως. (Arg. I.774-81)

そして彼（イアソン）は町へと向かって歩いたが、輝く星のようであり、

新しく作られた小部屋に閉じこもる花嫁たちが、
館の上へと昇っていくそれ（星＝イアソン）を眺めた。

すると（星は）青暗い空において美しく赤く輝きを放ち、彼女たちの
目を魅了した。

未婚の乙女たちもまた

遠い異国にいる未婚の男に焦がれて、喜ぶ、

——彼のところに彼女が嫁ぐようにと両親が気にかけている。

そのように英雄は、侍女の足跡を追い、向かった。

る。Beye (1982: 91) は、さらに外套の文様が全て戦争と性愛に関係するものであることを指摘し、同様の見方をしている。

*14 Beye (1969) 43.

ここでイアソンが女性たちの下へ向かう姿は、赤く輝く星に喩えられる。星に喩えるという比喩表現は、ホメロス作品において何回かみられる^{*15}。特に英雄に対して用いられている箇所としては、『イリアス』5.5において戦闘の前にアテナから力と勇気を授けられたディオメデス、11.62において戦闘のためにトロイア軍の隊列に並んだヘクトルに対して用いられていることが確認できる。ここから、ホメロス作品において星の輝きは、英雄に対して用いられる場合、戦闘を前にした姿を喩えるために使用されていることが分かる。この二箇所に加えて、特に本箇所との類似性が高い箇所として、Beye^{*16}も指摘する、『イリアス』22.25-31において、アキレウスがヘクトルの下へ向かい戦場を駆け抜ける様子が星に喩えられているところを挙げることができる。町へと進むイアソンの姿は、花嫁たちに目撃され、その眼を魅了するという効果を生んでいるが、『イリアス』においても、ヘクトルの下に駆けていくアキレウスの姿はトロイア軍（特にプリアモス）に目撃され、熱という効果を生んでいる。ここでアキレウスはヘクトルと戦闘をするために向かっているが、イアソンの目的はヒュプシピュレとの面会であり、戦闘ではない。

さらに、上述したイアソンの美しさに関係がある比喩においては、いずれも赤色を示す語彙として、「*ῥευθος* (1.726)」や「*ῥευθόμενος* (1.778)」が用いられていることも印象的である^{*17}。『アルゴナウティカ』において、*ῥευθος* や *ῥεύθω* といった語彙は、エロスや異性を魅了することと関係する場面において使われることが多い^{*18}。1.1230においては、ニンフを魅了するヒュラス

*15 ホメロス作品において星の比喩が用いられている箇所については Wilkins (1920: 148) の分類表を参照した。

*16 Beye (1969) 43.

*17 この赤色の語彙に関する記述は、2023年4月に国際基督教大学にて開催された研究会で佐野好則先生にご指摘頂いた内容から発想を得て、筆者の責により詳述した。

*18 例外は 3.163 と 4.126, 173。3.163 では太陽が輝く様を描写する際に用いられている。4.126 では黄金の羊毛が太陽のように輝く様を描写する際に用いられている。4.173 では、黄金の羊毛を手に入れて掲げたイアソンにその羊毛の輝きが差し掛かる様を描写する際に用いられている。

の姿を示す際にこの語が使われている。3.122 においては、エロスの頬の赤みを表現するために用いられている。3.298 では、エロスの矢に射られイアソンへの恋に落ちたメデイアの頬を描写するために用いられている。3.963 では、イアソンの姿を見たメデイアの頬の描写に用いられている。また、類似する語彙である ἐρυθραίνω^{*19} は、1.791 ではイアソンの姿を見たメデイアの頬の描写に用いられている。よって、本叙事詩における赤色を示す表現は、エロスや異性を魅了することと関係深いということができるかもしれない。

このようにヒュプシピュレに面会するために町へ向かうイアソンの姿は、エクフラシスや赤く輝く太陽・星の比喩を用いて描かれているが、これらはホメロスにおいて、特に戦闘を前にした英雄に対して用いられている。アポロニオスがこれらの表現をイアソンに対して用いたことは、イアソンの英雄としての卓越性を映し出すと同時に、その装いの目的は戦闘ではないという違いを明らかにする。この比喩表現の使用は、Knight によっても、ホメロスにおいて戦闘で用いられる比喩を新しい文脈において用いた例の一つとして、挙げられている^{*20}。そして、「ἐρυθρός (1.726)」「ἐρυθρόμενος (1.778)」といった表現がイアソンの姿を示す際に用いられることは、戦闘ではなく、エロス・異性愛と関係のある描写として、本場面を印象付ける効果を与えるだろう。

実際に、着飾ったイアソンの姿は、戦場で描かれるのではなく、レムノス島の娘たちの目に好ましく写った。このことは、本場面において繰り返す語られる。まず、上述した比喩の中で、「彼女たちの目を魅了した (σφισι ... ὄμματα θέλγει 1.777)」とされている。これに加えて、イアソンが町に入ると、「そして彼ら (イアソンと侍女) がちょうど門と町の中へと入ると、町に住む娘たちは後ろから押し寄せた、異国の者を喜んで (καί ῥ' ὅτε δὴ πυλέων

^{*19} この語は他に、3.681 においては恋に苦悩し恥じらうメデイアの姿を描写する際に用いられており、4.474 ではアプシュルトスを殺した血を受け止めたメデイアのヴェールや上衣の描写に用いられている。

^{*20} Knight (1995) 20.

τε καὶ ἄσπετος ἐντὸς ἔβησαν, | δημότεραι μὲν ὄπισθεν ἐπεκλονέοντο γυναῖκες |
 γηθόσυναι ξείνων· 1.782-4)」と描写される。イアソンが町を去る時も同様であり、「そしてすぐに彼（イアソン）は引き返す方へと歩いた。すると彼のまわりで、あちらこちらからきた大勢の娘たちが喜びはしゃいだ、彼が門を出ていくまで (αἶψα δ' ὀπίσσω | βῆ ῥ' ἔμιν· ἀμφὶ δὲ τὸν γε νεήριδες ἄλλοθεν ἄλλαι |
 μυρίαί εἰλίσσοντο κεχαρμέναι, ὄφρα πυλάων | ἐξέμολεν. 1.842-5)」とされる*21。

戦闘で用いられる比喩を使用して、異国の女性たちのもとへ姿を表す英雄を描写するということについては、『オデュッセイア』6.127-40において、島に流されたオデュッセウスが、助けを求めパイエクス人の娘たちのところに姿を表した際、獅子に喩えられているという場면을類似した場面として挙げることができる*22。ただし、ここでオデュッセウスについては「すると海水で苦しめられた彼（オデュッセウス）は、彼女たちに恐ろしく思われて、そして彼女らは思い思いに、あちらこちらへと逃げ出した、砂浜へと。(σμερδαλέος δ' αὐτῇσι φάνη κεκακωμένος ἄλμηι, | τρέσσαν δ' ἄλλυδις ἄλλη ἐπ' ἡϊόνας προυχούσας*23 6.137-8)」と記述されているため、その姿は女性たちに好まれるものではない。しかし、その後オデュッセウスは、入浴をし、ナウシカの命で侍女から与えられた服を身につけ、女神アテナによって美しさがふりかけられると、「その美しく好ましい姿により輝く (κάλλει καὶ χάρισι στίλβων· 6.237)」とされる (6.224-37)。つまり、ここでオデュッセウスはアテナの力を直接受けることによって美しく輝く姿を得た。一方で、イアソンはアテナからの贈り物である外套を身につけることで、同様の評価を得る。

*21 ただし、レムノス島の娘たちがイアソンを歓迎する背景には、男たちがいない島において、トラキア人襲来の恐怖から守ってくれる人を求めているということがあるため、彼女たちの喜びは、単にイアソンの見た目の美しさに所以しているわけではない。

*22 Hunter (1993) 48.

*23 本稿における『オデュッセイア』本文の底本は全て West (2017) を使用した。

このことは、神の力を間接的に受けるという本叙事詩の特色の表れ^{*24}であり、イアソン自身の美しさにより焦点が当たる表現になっていると考える。

加えて、『アルゴナウティカ』における唯一のエクフラシスがこの面会の直前に位置していることは、続くレムノスの娘たちを魅了し、ヒュプシピュレと対面する場面を、本叙事詩において特に強く印象付ける効果があると考ええる。

2.2 指導者イアソンと年長者ヘラクレス

ヒュプシピュレに対してイアソンは、1.836-41において、町に滞在することを了承するものの、「私は決して軽々しい気持ちから辞退しているのではなく、私を悲惨な試練がかきたてているからである（“ἐγὼ γὰρ μὲν οὐκ ἀθερίζων | χάζομαι, ἀλλὰ με λυγροὶ ἐπισπέρχουσιν ἄεθλοι.” 1.840-1）」と述べ、レムノス島の支配者となることは拒む。『オデュッセイア』で描かれる、カリュプソやナウシカ、キルケのエピソードにおけるオデュッセウスと同様に、ここでイアソンは、試練（オデュッセウスの場合は帰国）のために長居することを拒絶する。ただし、キルケの館でやがて歓待を受けるうちに、帰国のために急ぐことを忘れてしまったオデュッセウス（10.466-71）のように、イアソンらアルゴナウタイの出発も引き延ばされていくことになる（1.861-2）。オデュッセウスは、一年という長い期間が経過した後、部下からの咎めにより帰国のために行動を起こす（10.469-74）が、イアソンの場

*24 Knight (1995: 100) は、ホメロスにおいては、神が直接力を与えたり、手助けをしたりする点に『アルゴナウティカ』との違いがあると指摘している。また、Hunter (1993: 78-9) は、『アルゴナウティカ』全体を通して、神々の重要性はホメロスよりも低いことに特徴があると指摘する。彼は、「人間の行為と神々の動機の関係にホメロスと基本的な違いはないが、提示のバランスが人間の意思決定により重きが置かれるように変更されている（... the relation between human action and divine motivation—does not differ substantially from that of the Homeric poems, nit the balance of the presentation has altered to give greater prominence to human decision-making.）」という見解を示している。

合は、ヘラクレスに非難されたことにより、レムノス島に長い間留まりはしなかったのだと語られる (I.861-4)。この場面は、このように『オデュッセイア』のキルケのエピソードにおけるオデュッセウスと比較すれば、イアソンがレムノス島に滞在し続けようとしてしまったということに関して、Pietsch*²⁵ が述べているように、彼の人物造形にホメロスとの違いを見ることができない。むしろオデュッセウスの姿と重ね合わせられることにより、冒険の中核を担う英雄として、イアソンは描き出されている。よって、この場面の『アルゴナウティカ』ならではの特色はイアソンの人物造形ではなく、彼のレムノス島滞在を辞めさせるために進言することができた英雄ヘラクレスの存在にあると考える。

オデュッセウスら一行がキルケの館を訪れる話は、『オデュッセイア』第十歌において描かれている。ここでは、まず先行したエウリュロコスが、キルケにより食事を振る舞われた他の部下たちが直ちに豚へと変えられてしまったことを目にし、オデュッセウスに報告する (10.229-60)。オデュッセウスは、引き止めるエウリュロコスの言葉を聞き入れることなく、彼を船に残してキルケの館に向かう。そしてヘルメスの助言通りに振る舞うことで、自らが豚に変えられることを防ぎ、自らに危害を及ぼさないことを約束させたうえでキルケと夜を共にし、部下たちを解放させる (10.261-399)。しかしその後オデュッセウスは、キルケの勧め通りに、一度船に戻り、待たせていた部下たちを連れて、歓待を受けるために再び館へ向かおうとする (10.400-27)。ここでエウリュロコスはキルケの館に向かうことに再び反対するが、それも聞き入れられることなく、叱責を恐れたエウリュロコスもまた、共にキルケの館に向かうことになる (10.428-48)。その結果、彼らはキルケの館で歓待を受けるうちに、一年もの月日をその場所で過ごすことになった。オデュッセウスは一年たつてようやく、部下たちからの言葉により、帰国のため先を急ごうと行動を起こす (10.466-75)。

一方で、『アルゴナウティカ』においては、イアソンたちが女性たちの下

*25 Pietsch (1999) 111-2.

へ向かう（そしてそのまま歓待を受ける）中で、ヘラクレスは「ヘラクレスを除いて。というのも、彼は自ら進んで船の傍らに残った、わずかな選ばれた仲間たちと共に（Ἡρακλῆος ἀνευθεν, ὁ γὰρ παρὰ νηὶ λέλειπτο | αὐτὸς ἐκὼν παῦροί τε διακρινθέντες ἐταῖροι. 1.855-6）」とされ、船に残ったことが示されている。ここで「ἐκὼν」という語が使用されることにより、『オデュッセイア』10.438-48において、自分の意向とは逆に、皆に従わなくてはならなかったエウリュロコスとの違いは明らかである。その後、長い月日が経過してしまう前に、ヘラクレスは、以下の言葉を述べてイアソンを咎めた。

“δαίμόνιοι, πάτρης ἐμφύλιον αἶμ’ ἀποέργει
 ἡμέας; ἦε γάμων ἐπιδευέες ἐνθάδ’ ἔβημεν
 κείθεν, ὄνοσσάμενοι πολυήτιδας; αὐθι δ’ ἔαδεν
 ναίοντας λιπαρὴν ἄροσιν Λήμνοιο ταμέσθαι;
 οὐ μὰν εὐκλειεῖς γε σὺν ὀθνεῖησι γυναιξὶν
 ἐσσόμεθ’ ὥδ’ ἐπὶ δηρὸν ἐελμένοι· οὐδέ τι κῶας
 αὐτόματον δώσει τις ἐλὼν θεὸς εὐξαμένοισιν.
 ἴομεν αὖτις ἕκαστοι ἐπὶ σφέα· τὸν δ’ ἐνὶ λέκτροις
 Ὑψιπύλης εἵατε πανήμερον, εἰσόκε Λήμνον
 παισὶν ἐσανδρώσῃ, μεγάλη τέ ἐ βάξις ἴκηται.” (Arg. 1.865-74)

「惨めな者たちよ、一族殺害の穢れが祖国から私たちを引き離すのか、あるいはあの場所からここへと、婚姻を求めて来たのか、町の娘たちが好ましくないために。ここに住み、レムノスの豊かな耕地を切り分けることにしたのか。だが、私たちは名誉を得ないだろう、異国の女性たちと、長く閉じ込められているために。だが、どんな神も、羊毛を取り、自ら動き、与えてはくれない、私たちの祈りによって。我々はそれぞれ、自分の国に戻ることにしよう。そしてあの者（イアソン）をヒュプシピュレの寝室にずっと取り残しておこうではないか。やがてレムノスから子供たちが溢れ、大きな評判を手にするまで。」

そもそもイアソンが指導者に選ばれたのは、最初にイアソンがアルゴ船に乗

る英雄たちを集めた際、指導者の役割が期待されたヘラクレスが、その名誉 (κῦδος 1.345) をイアソンに返したためであった。ここでヘラクレスは、他のアルゴナウタイに解散を呼びかけている (1.872-3) ことから、かつて自ら名誉を与えたイアソンに対して、指導者としての名誉に相応しくないと咎めている場面だと理解し得る。

Hunter は、ヘラクレスの発言が『イリアス』2.235-8 におけるテルシテスの発言を想起させるということを指摘している^{*26}。テルシテスは、この場面において、ギリシア軍の戦意を試すために帰国をほのめかしたアガメムノンに対して、彼は既に多くの女性を得ているのに、まだ若い女性を望むがために、指導者であるあなたが戦士たちを危険に晒すのかと怒りを顕にし、故国へ帰ってしまおうと呼びかける。このテルシテスの言葉は、第一歌において語られたアキレウスとアガメムノンの衝突と、指導者としての資質に関する論争を想起されるようになっていく。このこともまた、ヘラクレスの発言がイアソンの指導者としての名誉を咎めるものであると理解する根拠となると考える。ただし、この場面において、口喧嘩を頻繁に挑む癖により、オデュッセウスからもともと憎まれていた (2.220) テルシテスは、オデュッセウスに叱りつけられ、王笏で打たれることになり、他の兵士たちはその姿を見て笑う (2.243-77)。

Clauss は、イアソンは異国の女性と恋に落ちることで黄金の羊毛を獲得することなどから、ヘラクレスの非難の言葉は誤りであると非難する^{*27}。しかし、『オデュッセイア』における歓待に耽り冒険を忘れるということに対する扱いから考えると、このヘラクレスの言葉は正しく、イアソンも当初は自覚していた (1.836-41) ように、レムノス島に長期間滞在することは、試練を達成するために適した行動ではない。また Hunter が指摘しているように、紀元前四世紀初頭に哲学者クセノポンが『ソクラテスの思い出』に記した言葉「というのも、善くそして美しくある物の何も、苦勞と探求なし

*26 Hunter (1993) 35-6.

*27 Clauss (1993) 138.

に、神々は人間に与えはしない (τῶν γὰρ ὄντων ἀγαθῶν καὶ καλῶν οὐδὲν ἄνευ πόνου καὶ ἐπιμελείας θεοὶ διδῶσιν ἀνθρώποις 2.1.28*28)」がヘラクレスの発言 (1.870-71) と対応している。このことは、読者・聴衆に、プロディコスの寓話に始まるヘラクレスの高潔で禁欲的な一面を想起させるため*29、彼の発言が理に適っていることを示唆している可能性がある。

一方で、Hunter は、ヘラクレスの言葉は、かつてヘラクレス自身が行ったことを反映していることもまた指摘する。ここでヘラクレスは、「一族殺害の穢れ (ἐμφύλιον αἷμ' 1.865)」とレムノス島で女性たちが男性を惨殺したことに触れているが、神話では、ヘラクレスもまた自身の子供を殺している。『アルゴナウティカ』においては、第一歌の終わりでグラウコスが、彼が不在となったのは十二の功業を果たすためであると告げ、第二歌以降において、ヘラクレスが十二の難行に挑んでいる様子が語られる。ヘラクレスが故郷を離れこの難行に挑むことになった要因は、神話によると、彼がヘラの企みにより錯乱し、メガラとの間に生まれた自分の子供とイピクレスの子供を炎に投げ入れ、殺してしまったことにある。つまり、ヘラクレスは子殺しをしたことを契機に、故郷から離れ、アルゴ船からも降りることになるのである。加えて、ヘラクレスは「やがてレムノスから子供たちが溢れ、大きな評判を手にするまで。 (“εἰσόκε Λημνον παῖσιν ἐσανδρώσῃ, μεγάλη τέ ἐ βᾶξις ἵκηται.” 1.873-4)」と語っているが、ヘラクレスの花嫁たちのエピソードは有名であり、その子孫はギリシア全土に住んでいることが知られている。よって、ここでのイアソンは、ヘラクレス自身の行為を模倣しているにすぎない。Hunter は、これをヘラクレスに対する「複雑な皮肉」であると解釈する*30。

しかし、このヘラクレスの言葉において肝要なのは、彼に対する「複雑な皮肉」であるということではなく、より明白である本叙事詩におけるヘラクレスのアルゴナウタイに対する立ち位置と、アポロニオスは、ヘラクレスに

*28 本文の底本は Marchant (1992) を用いた。

*29 Hunter (1993) 33.

*30 Hunter (1993) 34-6.

関する神話が過去に人口に膾炙されたものであると認識していた可能性が高いという、より高次の事柄であると考ええる。

ヘラクレスは、古代ギリシア人の間で絶大な人気のある英雄であり、ホメロス以降の叙事詩において、主人公として多く語られてきた^{*31}。例えば、紀元前七世紀の詩人ペイサンドロス^{*32}と紀元前五世紀の詩人パニユアシス^{*33}は、叙事詩『ヘラクレイア』を描き、ヘラクレスにまつわる伝承の大部分を伝えたとしてその名が残っている。このように既に叙事詩の主人公として過去に語られ尽くした英雄であるヘラクレスは、『アルゴナウティカ』においてイアソンらアルゴナウタイよりも年上の英雄として登場し、イアソンに指導者としての名誉を授ける。ヘラクレスは、十二の難行に挑むという定めにより、第一歌の終わりに船から置き去りにされる(1.1240-315)。しかし、ヘラクレスは、置き去りにされた後、直接アルゴナウタイの前に姿を表しはしないものの、第四歌でリビュアの砂地を通過したのち、トリトニスの水辺に至ったアルゴナウタイの助けとなっている(4.1381-460)。ここで彼らは喉の渇きに苦しみ、湧水を探し求めていたが、先にヘラクレスが、十二の功業の一つとして、この地に至りヘスペリデスの黄金の林檎を奪うと共に、岩を蹴り上げて水を噴き出させていたことにより、彼らもまた水を得ることができる。つまり、ヘラクレスとは、高次には叙事詩の主人公として過去に先導して多く描かれた英雄であることに加えて、物語の中においても、アルゴナウタイよりも一歩先を行き、定められた冒険(功業)をこなしている英雄なのである^{*34}。

これは Hunter も指摘しているように、アルゴ船に乗船した際、ヘラクレスは十二の功業の途中にあり、この試練への参加は彼が功業により名声を得ることに対する妨げとなっているため、自らの冒険のために焦っている可能

*31 Galinsky (1972) 2, 中務 (2020) 430-7.

*32 中務 (2020) 245-54, Tsagalis (2022) 73-218.

*33 中務 (2020) 255-79.

*34 Lawall (1966: 124-5) と Galinsky (1972: 108-14) がこれに関して論じている。

性がある*35。よって、最初に「一族殺害の穢れが祖国から私たちを引き離すのか (πάτρης ἐμφύλιον αἷμ' ἀποέργει | ἡμέας; 1.865-6)」と述べることは、十二の功業の始まりについて想起させることで、自身もまたイアソンと同様に、定められた運命の中にいる英雄であることを示唆する。そしてヘラクレス自身もまさに今そうであるように、試練のために焦らなくてはならないということから、冒険により名声を得るために先を急ぐ必要があると、年上の英雄として助言している場面だと理解しうる。

ヘラクレスによる言葉が、彼の女性関係の多さを示唆することは、Hunterの指摘のように、婉曲的な皮肉であるのか、或いは他の意図があるのかを、本叙事詩の中でアポニオスが明確に示すことはない。しかし、彼が年上であることと、アルゴナウタイを先導し助ける立ち位置にいるということは、物語から明らかである。

よって、この場面は、『オデュッセイア』のキルケの館におけるオデュッセウスと同様に、レムノス島で女性と共に長い期間享楽に耽るかと思われたイアソンが、オデュッセウスとは異なり、ヘラクレスによる助言があったために、指導者としての名誉を取り戻し、早々に切り上げて冒険を続けることができたと理解し得る。ヘラクレスによる咎めは、『オデュッセイア』におけるエウリュロコスや『イリアス』におけるテルシテスを想起させるものの、彼らとは異なり、年上の英雄としての助言であったため、イアソンにも、他のアルゴナウタイにも受け入れられるという結果を生む。このことは、ヘラクレスの言葉を聞いたアルゴナウタイの様子が「そしてこれに対して誰も両目をあげようとせず、彼ら(アルゴナウタイ)は発言もしなかった。(ἐναντία δ' οὐ νύ τις ἔτλη | ὄμματ' ἀνασχεθῆειν οὐδὲ προτιμυθήσασθαι 1.875-6)」と描写され、すぐに航海の準備を行う場面へと移り変わるところに現れている。

2.3 ヒュブシピュレとの別れ

レムノス島を離れることになったイアソンは、ヒュブシピュレと別れの言

*35 Hunter (1993) 34.

葉を交わす (I.886-909)。最初にヒュプシピュレは、イアソンが黄金の羊毛を手に入れて帰国を果たした後、自らのもとに仲間たちと共に戻ってきてほしいという、自分でも不可能だとわかっている望みを口にした後に、自分のことを覚えていてほしいとイアソンに告げる (I.888-98)。これに対するイアソンの言葉は、以下の通りである。

“Ὑψιπύλη, τὰ μὲν οὕτω ἐναΐσιμα πάντα γένοιτο
ἐκ μακάρων· τὴν δ' ἐμέθεν πέρι θυμὸν ἀρείω
ἴσχαν', ἐπεὶ πάτρην μοι ἄλις Πελῖας ἔκρητι
ναιετάειν· μούνον με θεοὶ λύσειαν ἀέθλων.
εἰ δ' οὐ μοι πέπρωται ἐς Ἑλλάδα γαῖαν ἰκέσθαι
τηλοῦ ἀναπλώνοντι, σὺ δ' ἄρσενα παῖδα τέκῃαι,
πέμπε μιν ἡβήσαντα Πελασγίδος ἔνδον Ἰωλκοῦ
πατρί τ' ἐμῷ καὶ μητρὶ δύης ἄκος, ἣν ἄρα τοὺς γε
τέτμη ἔτι ζῶοντας, ἦν' ἀνδιχα τοῖο ἀνακτος
σφοῶσιν πορσύνωνται ἐφέστιοι ἐν μεγάροισιν.” (Arg. I.900-9)

「ヒュプシピュレよ、それら全てのことが、そのように
至福の神々により叶いますように。だが、あなたは私のことについ
て、心を
より強く保ってくれ。というのも私にとっては、ペリアスに許され、
祖国に暮らすことで十分だ。ただ神々が私を試練から解放してくれる
ならば。

しかし、もし遠くへ船を漕ぐ私に、ヘラスの大地へと行くことが
定められておらず、あなたが男児を産んだなら、
青年となったその子を、ペラスゴスのイオルコスへと送ってくれ、
私の父と母のために、悲嘆の慰めとして。もしまだ
彼らが生きていて、彼が会えたなら、その王（ペリアス）から離れて、
その屋敷の炉のそばで、彼らの世話をしてくれるように。」

このイアソンの言葉は、ヒュプシピュレの提案を拒否している。そしてさらに、彼の提案は、もし自らが帰国できなければ、レムノス島を統治するため

にヒュプシピュレらが当初より望んでいる男の子^{*36}を、自分の故郷に送ってくれということである。Fränkel は、このイアソンの要求に関して「彼の冷たい答えは、不意の厳しさを通して、私たちに不審の念を抱かせる^{*37}」と指摘している。Natzel もまた、彼のこの態度を「ある種の冷淡さをほのめかす^{*38}」と述べている。彼の言葉は、確かにヒュプシピュレに対する冷淡な態度を示唆しているように思われるが^{*39}、しかしそれだけではない。この言葉には、ここで彼の関心が、堀川が指摘しているように、祖国にあり、レムノス島にはないことが表れている^{*40}。つまりこれは、年上の英雄ヘラクレスの言葉が示唆した通り、レムノス島に留まることは帰国を阻むということを出したイアソンが、自らの祖国に対する関心の高さを、ヒュプシピュレに対する言葉を通じて示した言葉でもあると考え得る。このことは、本稿第2.2 節において示したヘラクレスからの非難が正しかったことを、イアソンの言葉を通して再提示することもまた意味していると考ええる。

このヒュプシピュレとの一連のエピソードは、女性により歓待を受け、その場に留まるか、或いは故国に急ぎ帰るかという点をめぐる話であるという点で、『オデュッセイア』においてオデュッセウスを歓待した女性たちとのエピソードを、そして本稿 2.2 において示したように、とりわけキルケの館におけるエピソードを想起させる。キルケとのエピソードにおいて、キル

*36 堀川 (2019: 58) : 断片のみ伝わるエウリピデス『ヒュプシピュレ』において、ヒュプシピュレはイアソンの子として二児を儲けたことが語られる。

*37 Fränkel (1968) 120 on Arg. 1.900–9: 'Jason kühle Antwort befremdet uns durch ihre schroffe Härte; ...'.

*38 Natzel (1992) 180: 'eine Andeutung der Kälte'.

*39 筆者は当初、この言葉が、イアソンの冷淡な態度ではなく単に故郷への関心を示していると考えていたが、匿名査読者によるご指摘から発想を得て、この2つが両立していると考えに至ったため、この再考を踏まえて、筆者の責により、このように記した。(匿名査読者からは他にも多数、本稿の不備や矛盾をご指摘いただき、同時に学び多い事柄をご教示いただいた。心より感謝申し上げます。)

*40 堀川 (2019) 58: 「イアソンにとって大切なのは父母と故郷であり、レムノスではない」。

ケの館を去る際に、歓待にふけるオデュッセウスに対して述べられた部下たちの言葉は、祖国のことを考える必要があるということに言及している(10.472-4)。これと比較し考えると、帰国すること、そして祖国を気に掛けていることを再度イアソンがこの言葉で表明することは、彼が英雄として冒険に再び向き合っていることを示唆する。つまり、これはイアソンのヒュプシピュレに対する冷たい態度の表れであると同時に、彼が英雄として冒険に臨む気持ちの表明でもある。この言葉を告げたイアソンが、「先立って(παροίτατος 1.910)」船に乗り込むと、アルゴ船は次の冒険へと向かう。

3 メディアの愛に助けられて

3.1 イアソンの美しさ

第三歌におけるメディアに対するイアソンの描写の中で、まず触れる必要があるのは、その美しさに関する描写である。第三歌においては、三人の女神が策略をめぐらし、エロスにメディアを射てイアソンを愛するようにしなさいと命じる様子が描かれる(3.7-166)。そしてメディアがエロスの矢に射られると、彼女はその心においてイアソンに対する恋の炎を燃やす(3.275-98)。このようにしてイアソンへの恋心を抱かされたメディアが、アイエテスとの面会を終えて帰るイアソンを目にすると、彼の美しさが以下のように語られる。

θεσπέσιον δ' ἐν πᾶσι μετέπρεπεν Αἴσονος υἱὸς
 κάλλει καὶ χαρίτεσσιν· ἐπ' αὐτῷ δ' ὄμματα κούρη
 λοξὰ παρὰ λιπαρὴν σχομένη θηεῖτο καλύπτρην,
 κῆρ ἄχεϊ σμύχουσα, νόος δέ οἱ ἦντ' ὄνειρος
 ἐρπύζων πεπότητο μετ' ἵχνια νισσομένοιο. (Arg. 3.443-7)

そして皆の間でアイソンの子は神々しく際立っていた、
 美しさと優雅さにおいて。その彼を、娘は両目を
 斜めに輝くヴェールから向けて見つめ、
 胸は苦悩でくすぶった。その心は、まるで夢のように這いながら、
 行く人の跡を追い、舞った。

ここでは、イアソンの美しさが他のアルゴナウタイ（アウゲイアス・テラモン・アルゴス）を凌いでいる様子が描写されている。この表現においては、「神々しい（θεσπέσιον 3.443）」と、形容詞 θεσπέσιος 中性単数対格が副詞として用いられている。Hunter^{*41} や Campbell^{*42} は、これはイアソンに対する女神（ヘラ）の働きかけの表れであると指摘する。そしてこれは、『オデュッセイア』6.229において、アテナがオデュッセウスに美しさをふりかけたことを想起させる。この場面は、『オデュッセイア』6.237において、ナウシカが目にする美しいオデュッセウスの姿が、「美しさと優美さにおいて輝き（κάλλει καὶ χάρισι στίλβων）」と 3.444 と共通する語彙により表現される点においても類似している^{*43}。イアソンの美しさを表現する際に、アポロニオスがオデュッセウスとナウシカの対面場面を想起させる表現をするというのは、本稿第 2.I 節に記した、1.774-81 におけるヒュプシピュレと面会する場面と同様である。ここでもまた、神の力を間接的に受けるという本叙事詩の特色が表れている。アポロニオスは、神々の存在をほのめかしながらも、イアソンの姿が美しい要因が、ヘラの働きかけによるものなのか、メデイアがエロスによって心を掻き立てられているためであるのか、それともイアソン自身が美しいのかをまだはつきりさせない。このことにより、1.774-81 と同様に、イアソン自身の美しさに焦点が当たる書き方になっているといえると考える。

第三歌においては、他にも二箇所（3.919-25, 956-66）においてイアソンの美しさが描写されている。3.616-834 においては、エロスに掻き立てられた恋心に従いイアソンらアルゴナウタイを助けるか、両親や家を裏切らないことを優先するかで葛藤し、前者に決めるメデイアの様子が描写される。その後、3.828-912 において、メデイアは身支度を整えて葉を持ち、イアソンの

*41 Hunter (1989) 146 on Arg. 3.443-5.

*42 Campbell (1994) 365 on Arg. 3.443.

*43 Hunter (1989) 146 on Arg. 3.443-5, Campbell (1994) 365 on Arg. 3.444-5.

もとへと向かいながら、侍女たちに自らの決めたことと策略を語る。その策略により、メデイアと会うために連れ出されたイアソンの姿は、以下のよう
に描写される。

ἐνθ' οὐ πώ τις τοῖος ἐπὶ προτέρων γένετ' ἀνδρῶν,
οὐθ' ὅσοι ἐξ αὐτοῖο Διὸς γένος, οὐθ' ὅσοι ἄλλων
ἀθανάτων ἥρωες ἀφ' αἵματος ἐβλάστησαν,
οἷον Ἰήσωνα θῆκε Διὸς δάμαρ ἥματι κείνῳ
ἡμὲν ἐσάντα ἰδεῖν ἡδὲ προτιμυθῆσασθαι·
τὸν καὶ παπταίνοντες ἐθάμβεον αὐτοὶ ἐταῖροι
λαμπόμενον χαρίτεσσιν· (Arg. 3.919–25)

そこで、より以前の戦士たちの中に、
ゼウス自身の子孫であろうと、他の不死なる神々の血を引き生まれた
英雄たちであろうと、
その日にゼウスの妻が、イアソンを変えたその姿ほどの者は、
顔を合わせても、また話をしても、まだ誰もいなかった。
仲間たち自身もまた驚いた、
優美に輝いている彼を見て。

ここではじめて、ここまでイアソンの美しさが描写された二つの場面 (I.774–81, 3.443–7) とは異なり、その美しさを作り出したのが女神ヘラであることが明示される。英雄の姿が神によって際立たせられるという点で類似した場面として、Hunter も指摘するように、『イリアス』2.474–83 において、陣営内を回り歩くアガメムノンの姿を、戦士たちの中で特に際立つように、ゼウスが変えたと描写される箇所と、先述した『オデュッセイア』第六歌のアテナとオデュッセウスの場面を挙げることができる^{*44}。『イリアス』においては、「そのように、アトレウスの子の姿をゼウスはその日に変えた (τοῖον ἄρ' Ἀτρεΐδην θῆκε Ζεὺς ἥματι κείνῳ^{*45} 2.482)」と語られており、この表現は、使

^{*44} Hunter (1989) 199 on Arg. 4.919–25.

^{*45} 本稿における『イリアス』本文の底本は全て West (1998–2000) を使用した。

用する語彙と語順において 3.922 と極めて類似している。また、姿の美しさを神との比較により提示するという点においても、アポロニオスはホメロス作品の両場面 (Il. 2.478-9, Od. 6.243) を踏襲している。

他の二つの場面 (I. 774-81, 3.443-7) においては、同様に『オデュッセイア』第六歌を示唆しながらも、この種の比喩は用いられていない点、またこの時のイアソンの美しさは、女性(メデイア)に対してのみではなく、仲間であるアルゴナウタイをも驚かせたこと (3.924-5) が語られている点から、本場面における美しさが、他の場面において語られた美しさよりも優れていることが示唆されている可能性があると考ええる。つまり、黄金の羊毛を手に入れる試練に挑むためにメデイアと面会するという冒険の最終局面に至って初めて、イアソンがヘラの力で、元来語られていた自らの美しさを、さらに強化されたことが明らかになる。

このヘラの力により強化された美しさは、「顔を合わせても、また話をしても (ἡμὲν ἐσάντα ἰδεῖν ἥδὲ προτυμυθήσασθαι 3.923)」と語られていることから、戦場ではなく、他者と(ここではメデイアと)面会する場面において効力を発揮することが示されている。Knight は、この点においても、ナウシカとの面会において美しさをアテナに付与された『オデュッセイア』第六歌のオデュッセウスが想起されると指摘する^{*46}。

この直後に、メデイアとイアソンは二人きりで言葉を交わす様子が描かれるが、メデイアの前に現れたイアソンの姿は、以下のように描写される。

αὐτὰρ ὁ γ' οὐ μετὰ δηρὸν ἐέλδομένη ἐφάανθη,
 ὑφ' ὅσ' ἀναθρόσκων ἄ τε Σείριος Ὠκεανοῦ,
 ὅς δ' ἦτοι καλὸς μὲν ἀρίζηλός τ' ἐσιδέσθαι
 ἀντέλλει, μήλοισι δ' ἐν ἄσπετον ἦκεν οἰζύν·
 ὥς ἄρα τῇ καλὸς μὲν ἐπήλυθεν εἰσοράασθαι
 Αἰσονίδης, κάματον δὲ δυσήμερον ὥρσε φαανθείς. (Arg. 3.956-61)

だが程なく彼(イアソン)は待ち望む人(メデイア)のもとに現れた、

^{*46} Knight (1995) 238.

オケアノスから高く昇るシリウスのように、
 それ（シリウス）はまさに美しく、また一際輝いて見えて
 昇るが、羊たちに言葉を失うほどの災禍をもたらす、
 そのように彼女のところへ見目麗しいアイソンの子はやってきて、
 そして現れると、恋の苦しみを掻き立てた。

ここで、イアソンの美しい姿は、シリウスの輝きに喩えられている。このことは、Hunter も指摘するように、『イリアス』22.25-32において、ヘクトルを討ち取るために戦場を駆け抜けていく姿が、オリオンの犬と称されたことを想起させる^{*47}。ここでオリオンは、星の中で最も明るいが、猛暑をもたらす不吉な星であると語られている点で、上述のシリウスと重なる。アキレウスを目撃したプリアモスにとって、彼の登場は息子ヘクトルの死の前兆であったが、ここでメデИАにとって、イアソンの登場は自らの家族・祖国に対する裏切りと悲嘆の前兆である。よって、メデИАとイアソンの面会は、アキレウスとヘクトルの面会を思い起こさせるようになっている。この比喩の使用では、本稿第2.1節において既に指摘した、I.774-81においてヒュプシピュレの目の前に現れたイアソンを星にたとえた箇所と同様に、ホメロスにおいては戦場の英雄に対して用いられる星の比喩を、アポロニオスは女性と面会する場面で用いている。ヒュプシピュレに対する比喩においては、イアソンの姿は不吉なものではなかったが、ここでアポロニオスは比喩表現をさらに『イリアス』に近づけ、メデИАにとってイアソンの姿を不吉なものとして提示した。

さらに、戦場で用いられた星の比喩を、恋人との面会場面で用いることが効果的である理由は、続く『イリアス』22.126-8において、いざアキレウスを待ち構えるヘクトルが、「今やもう、木や石から（注：非常に古い話から）はじめて、彼（アキレウス）と語り合うことはないのである、娘と青年のように、そうまさに娘と青年が互いに語り合うように。（*οὐ μὲν πως νῦν*

^{*47} Hunter (1989) 202 on Arg. 3.956-61.

ἐστὶν ἀπὸ δρυὸς οὐδ' ἀπὸ πέτρης | τῶι ὀαρίζεμεναι, ἃ τε παρθένος ἡΐθεός τε, |
παρθένος ἡΐθεός τ' ὀαρίζετον ἀλλήλουν.)^{*48}」と語っていることにある。ここで
ヘクトルが語り合うことなくアキレウスと剣を交えて殺されたのに対して、
アポロニオスは、まさにヘクトルがないと語った、若い恋人の逢瀬を繰り返
し（ヒュプシピュレとメデイア）描いた。ここでイアソンはメデイアと語り
合い、それによってメデイアの助けを得ることができ、これが、アイエテス
が課す試練を達成するための鍵となる。星の比喩の後に、ホメロスは英雄同
士の戦闘を描いたが、アポロニオスは女性と面会し語り合う場面を描くとい
う違いは、このヘクトルの言葉と響きあうことによって、『アルゴナウティ
カ』の筋書きがもつ独自の特色として、さらに印象付けられる。

つまり、『イリアス』は、英雄同士が対立する様子を描いているが、アポロ
ニオスは、イアソンが仲間と対立することなく、女性たちと言葉を交わしな
がら、試練を達成していく様を描いているのである。

3.2 「機嫌をとって (ὕποσσαίνων 3.974)」

イアソンの美しさが描写された後、続く 3.967-1247 においては、イアソ
ンとメデイアが顔を合わせ、言葉を交わす様子が描かれる。先に口を開くのは
イアソンであり、彼は「するとアイソンの子は、彼女が神による苦境に
陥っていると気づき、そして機嫌をとってこのような言葉をかけた (γνῶ δέ
μιν Αἰσονίδης ἄτῃ ἐνιπεπτηνίαν | θευμορίῃ, καὶ τοῖον ὑποσσαίνων φάτο μῦθον·
3.973-4)」と語られる。ここでイアソンはメデイアの苦悩に気づいており、
その上で「機嫌をとって (ὕποσσαίνων 3.974)」話を始める。この語は、動詞
ὕποσσαίνω の現在分詞単数男性主格形であり、ホメロスにおいてこの語は用
いられない。『アルゴナウティカ』においても、他の英雄や登場人物による
行為の描写では用いられることなく、イアソンの行為に対してのみ用いられ

^{*48} Wyatt (1999: 461) によれば、ここで同じ言葉が繰り返されることは、現実と比
喩の状況が非常に対照的であることを示していると理解される。

る語（他は 3.396, 4.410）である^{*49}。よって、この単語は、イアソンによる行為の性質を明確に示すために、アポロニオスが使っている可能性が高いと考える。

ここで、「機嫌をとって (ὑποσσαιῶν 3.974)」イアソンが述べる内容は、以下の通りである。まず彼は、「私は、他の虚勢を張る戦士たちのようではない (οὐ τοι ἐγὼν, οἷοί τε δυσσαυχέες ἄλλοι ἔασιν | ἀνέρες 3.976-7)」と述べ、メディアに自分を恐れず何でも偽らずに述べることを求める (3.975-84)。そして試練の後に与えられる栄誉を語って助けを嘆願し (3.985-1006)、最後に「というのも、お姿から、あなたは穏やかな優しさに溢れているようだ (ἦ γὰρ εὐκας | ἐκ μορφῆς ἀγανῆσιν ἐπητείησι κεκάσθαι. 3.1006-7)」と神々の祝福を述べて締めくくる。この語りかけの結果、イアソンに恋しているメディアは、彼に葉を渡し (3.1013-4)、自らの策略を語る (3.1026-62)。

このイアソンの「機嫌をとって (ὑποσσαιῶν 3.974)」話をするという態度を、Hunter は、イアソンがメディアを喜ばせる目的で言葉を述べていることを明らかにしていると指摘し、この分詞がここで用いられることで、続いてイアソンが述べることに對して、果たして本当のことを述べているのかという疑念が残されると指摘している^{*50}。Natzel は「メディアに対して卑劣である^{*51}」と評し、メディアが抱かされた恋心を知っていながら、それを利用していると批判する。

確かに本場面で、イアソンはメディアの恋心を知っていて、それを利用する。ただし、この箇所では「ὑποσσαιῶν」という語が用いられることは、単にイアソンの行為が、相手に対して卑劣であることを印象付けるという役割のみを果たしてはいない。この語が用いられる『アルゴナウティカ』の他の箇所 (3.396, 4.410) においては、Hunter が指摘しているように^{*52}、相手の感

^{*49} Hunter (1989) 142 on Arg. 3.396.

^{*50} Hunter (1989) 205 on Arg. 3.973-4.

^{*51} Natzel (1992) 76: 'gegenüber Medea ist sie niederträchtig'.

^{*52} Hunter (1989) 142 on Arg. 3.396, Hunter (2015) 139 on Arg. 4.410.

情を落ち着かせることを意味して用いられている^{*53}。3.396 では、イアソンがアイエテスの激情を押し留める言葉を述べる様子を表すために使われている。4.410 では、結婚の約束が破られると考え、怒るメデИАを押し留める言葉を述べるイアソンの様子を表すために使われている。Hunter は、3.396 の注釈で「英語の “fawn” や “flatter” の軽蔑的な調子を伝える必要はない。ここで、意味は『落ち着かせようとする』である^{*54}」と記している。

3.974 においても、他の箇所と同様に、イアソンの行為の意図は第一に、メデИАの苦境を宥めることにあると考えられる。そしてそれは、イアソンの賞賛の言葉を聞いたメデИАが、笑みを浮かべてイアソンに薬を渡したことで、成功に終わる。Hunter や Natzel が指摘するように、確かに本場面においては、他の二箇所とは異なり、その後述べられることが彼の真意なのかという疑念を残す可能性がある。しかしそのようなイアソンに対する疑念の通りに、彼が卑劣な行為を実際にしたと明確にわかる場面を、アポロニオスは本叙事詩の中でどこにも描くことがない。また、ここでイアソンが述べる言葉は、相手を讃えるためのものであったと言うことは、3.1008 において「讃えて (κυδαίνων)」と書かれていることから明らかである。そのため「ὑποσσαίνων」という語彙は、ここではまず、自らの目的（メデИАを讃え、その結果、試練を突破する手掛かりを得ること）のために、言葉をかけ感情を宥めるという、イアソンによる思慮深い行為を表現するために用いられていると理解することが良いと考える^{*55}。

ὑποσσαίνω という語彙は用いられていないものの、目的のために助けを求

*53 ただし LSJ によれば、『アルゴナウティカ』以外においては、「ὑποσσαίνω」の形で用いられており、‘fawn’、つまり他者（或いは犬）を過剰に褒めること、煽惑することを意味している。

*54 Hunter (1989) 142 on Arg. 3.396: ‘It need not carry the pejorative tone of Eng. “fawn” or “flatter”; here the meaning is “trying to soothe”’.

*55 *The Cambridge Greek Lexicon* (Diggle et al. 2021) s.v. ὑποσσαίνω もまた、『アルゴナウティカ』を例とし、「ὑποσσαίνω」の意味として ‘be soothing’, ‘reassuring’ のみを載せている。

めて女性に声をかけ、お願いをするという態度は、『オデュッセイア』第六歌におけるオデュッセウスのナウシカに対する態度 (Od. 6.149-85) と類似していると考えられるかもしれない。ここでは、海で遭難し、島へと漂着した後、茂みの中で寝ていたオデュッセウスが目覚めると、道を教えてもらい、服を与えてもらうという目的のために、洗濯をしていたナウシカに声をかけ、お願いをする。よって、自らの目的のために女性に助けを求めるという態度は、この『オデュッセイア』においてナウシカと出会ったオデュッセウスが示しているため、これと比較して、イアソンがメデイアに対してとりわけ卑劣であり、それが彼に特有の性質であると理解することは難しい。ただし、アポロニオスは、「機嫌をとって (*ὑποσσαίνων* 3.974)」という語を使用することで、相手の感情を押し留めるように話をするという、思慮深い態度を、イアソンの人物造形の特徴として印象付けることに成功している、とは言えるかもしれない。この場面におけるイアソンが卑劣であるという印象は、やがて彼とメデイアの関係が迎える転末と共に読者と聴衆により想起されるが、アポロニオスはこの場面でそれを明確に描きらず、曖昧な余地を残している。

続いて、イアソンが故郷へ帰ることを思い、自分のことを忘れないで欲しいとメデイアが告げる (3.1069-76) と、「すると彼 (イアソン) 自身にも、娘 (メデイア) の涙によって破滅の恋が忍び寄った (*τὸν δὲ καὶ αὐτὸν ὑπήκει δάκρυσι κούρης | οὐλος ἔρωσι* 3.1077-8)」と語られる。ここまで、エロスに矢を射られたことにより恋に苦しんでいたのはメデイアのみであったが、この言葉により、イアソンもまた、同じ「破滅の恋 (*οὐλος ἔρωσι* 3.1078)*⁵⁶」へ向かい始めたことが示唆される。このように、語彙の選択によりメデイアとイアソンの恋の転末を知る当時の読者と聴衆に不吉さを曖昧にほめかしてみせた後も、イアソンの相手の感情を落ち着かせようとする態度は保持され、

*⁵⁶ この「破滅の恋 (*οὐλος ἔρωσι* 3.1078)」という語句は、エウリピデス『メデイア』で描かれているこの二人の恋が迎える結末を読者と聴衆に想起させる。

メデиаの望みに対し、故郷について説明するイアソンの言葉は「このように彼（イアソン）は、穏やかな会話で宥めようと述べた（ὥς φάτο μελιχίοισι καταψήχων δάροισιν 3.1102）」と語られる。但しこれは上手いかず、メデиаが更に悲嘆を述べる（3.1105-17）と、イアソンはメデиаとの結婚を告げる（3.1128-30）。

ここから、メデиаとの面会において、イアソンもまた破滅の恋に向かい始めていることが示唆されているが、しかしメデиаのように、彼がその破滅の恋に苦悩する様を、アポロニオスは本叙事詩の中では描かず、この点においても曖昧な余地を残す。例えば、先述した 4.410 においては、黄金の羊毛を手に入れてメデиаと共に帰国する途中、婚姻の誓いが果たされないと思い、怒るメデиаを宥めるイアソンの様子が描かれている。ここでイアソンの言葉には、自らの試練を達成するために、相手を喜ばせたり、宥めたりする狙いがあり、恋に惑わされて苦悩し、結果的に本叙事詩内で自らの家族と祖国を裏切るメデиаと対照的に、（やがて破滅に至ることが読者と聴衆には明らかであるが）表面的には、未だイアソンは思慮深くあるように描かれる。

3.3 黄金の羊毛の獲得と女性たちの影

こうして、メデиаからの助けを得たイアソンが、試練に挑む前に祈願を行う様子は、3.1194-224 において描写される。ここでは夜遅く、他のアルゴナウタイが寝床の用意をする中、イアソンは「密かに動く盗人のように（κλωπήμος ἥυτε τις φῶρ 3.1197）」皆のもとを抜け出したと語られる。このとき、イアソンは「青黒い外套を（φᾶρος | ... κνάνεον 3.1204-5）」身につけている。そして、この外套について説明が続き、「それ（外套）を、以前レムノスのヒュブシピュレが贈った、熱烈な夜の思い出の品として。（τὸ μὲν οἱ πάρος ἐγγυάλισεν | Λημνιάς Ὑψιπύλη, ἀδινῆς μνημῆμιον εὐνῆς. 3.1205-6）」と記されている。この外套がイアソンに送られたことは第一歌においては語られなかったため、読者と聴衆は、ここで初めてその存在を知ることになる。

Hunter は、この祈願の儀式的な主要なモデルは『オデュッセイア』におけ

る招魂の場面（10.516-40, 11.23-50）であると指摘する^{*57}。10.516-40においては、キルケが自らの館からオデュッセウスを送り出す際に、帰国の道を知するために必要な、冥府への旅路において、必要な儀式の一つとしてオデュッセウスに伝える。11.23-50においては、実際にオデュッセウスがここで儀式を行う様子が描かれている。ここで、キルケはオデュッセウスの帰国に必要な助言を与えている。しかし、この儀式においては、オデュッセウスが身につけているものは描かれませんが、『アルゴナウティカ』における儀式の描写において、アポロニオスは、不釣り合いであるようにも思われる^{*58}かつての恋人であった他の女性（ヒュプシピュレ）から贈られた外套を用いる^{*59}。このことは、おそらくこの第三歌においてアポロニオスが女性（メデアイア）からの助力に焦点を当てていることと、無関係ではないだろう。つまり、ヒュプシピュレの名が挙げられることにより、読者と聴衆は、イアソンがかつて得た女性からの助力のこともまた思い起こす。儀式の背景に、女性（『オデュッセイア』の場合はキルケ）による助力が示されているという点においては、『オデュッセイア』に倣っていると言えるだろう。ただし、「青黒い外套を（*φάρος* | ... *κυάνεον* 3.1204-5）」イアソンが身につけたことで、女性から助力を受けている様を描いていることが、一層明確に示されていると考える。

このように身支度を整えた後、イアソンはメデアイアの薬を武器に振り撒き（3.1245-55）、イアソン自身にも薬を撒いた（3.1256-1267）。このメデアイアによる助力を得た結果、イアソンは身体的な力を発揮し、試練を突破することに成功する。

このような次第で無事試練を終えたイアソンであったが、しかし続く第四歌においては、アイエテスから約束通り黄金の羊毛を受け取るのではなく、

*57 Hunter (1989) 212 on Arg. 3.1029-51.

*58 Clare (2002) 249.

*59 Carspecken (1952) 123.

黄金の羊毛をこっそり盗み出して帰国することになる。まず第四歌においては、ムーサへの呼びかけの後、イアソンが試練を突破することができたのは、娘（メデシア）による助けあつてのことであろうと考えたアイエテスが、怒りに燃える様子が描写される（4.6-10）。その後、メデシアは父が自らの行ったことを知ったであろうと気づいて苦悩し、屋敷から逃げ出す（4.11-66）。逃げだしたメデシアは、試練の成功を祝っていたアルゴナウタイのもとへ行き、彼らを驚かせる（4.67-74）。アルゴナウタイがメデシアのいるところへ来ると、彼女は其の膝にしがみついて自らをアイエテスの恐怖から救い、共に船で逃げてほしいと頼む。（4.81-91）。

このメデシアに対して、返答するイアソンは以下のように描写される。

μέγα δὲ φρένες Αἰσονίδαο
γῆθεον. αἶψα δέ μιν περὶ γούνασι πεπτηνύϊαν
ἦκ' ἀναειρόμενος προσπτύξατο, θάρσυνέν τε·
“δαμονίη, Ζεὺς αὐτὸς Ὀλύμπιος ὄρκιος ἔστω
Ἥρη τε Ζυγίη, Διὸς εὐνέτις, ἣ μὲν ἐμοῖσιν
κουριδίην σε δόμοισιν ἐνιστήσασθαι ἄκοιτιν,
εὖτ' ἂν ἐς Ἑλλάδα γαίαν ἰκώμεθα νοστήσαντες.” (Arg. 4.92-8)

するとアイソンの子（イアソン）は、心を大いに喜ばせた。
そしてすぐに彼（イアソン）は縋り落ちる彼女（メデシア）を膝から
静かに起こすように抱きあげ、そして慰めた。

「哀れな者よ、証人であつてくれ、オリュンポスのゼウス自身と、
ゼウスの妻で婚姻の女神であるヘラが。確かに私の屋敷に、
正妻としてあなたを迎えるだろう、
もし私たちが帰国し、ヘラスの大地へと至った時には。」

イアソンはメデシアとの婚姻を（面会の場面に続けて）再び誓う。この場面においては、本稿第 3.2 節において示したように、面会の場面においてイアソンが婚姻について述べた際、メデシアを宥めようとしていたのと同様に、相手の感情を落ち着かせるために言葉をかけるというイアソンの思慮深い態

度が現れている*60。こうしてメデИАを船に乗せたイアソンらは、夜のうちに黄金の羊毛を奪い取り、帰国するために船を進める。船が出発してから、祖国へ手を伸ばし嘆くメデИАに対して、イアソンは「するとイアソンは、言葉によって励まし、嘆いている彼女を引き止めた (αὐτὰρ Ἰήσων | θάρσυνέν τ' ἐπέεσσι καὶ ἴσχανεν ἀσχαλώωσαν. 4.107-8)」と語られる。この描写にも同様に、言葉によって相手の感情を落ち着かせるイアソンの思慮深い態度が現れている。

メデИАと共に出発したイアソンが、黄金の羊毛を彼女と共に盗み出す様子は、4.109-66において語られている。しかし、この盗みにおいてイアソンが果たす役割は非常に少ない。黄金の羊毛は大蛇によって守られているが、この大蛇はメデИАが魔法によって魅了し、眠らせる (4.145-161)。イアソンは、その大蛇に立ち向かうメデИАの後を「恐れながら (πεφοβημένος 4.149)」追いかける。この場面について、Hunter*61が指摘するように、ペレキュデス*62やヘロドロス*63の断片は、イアソンが大蛇を殺したことを伝えている。そしてピンダロス『ピュテΙΑ祝勝歌』第四歌は、「彼は緑の眼でまだらの背の蛇を術策により殺した (κτείνει μὲν γλαυκῶπα τέχναϊς ποικιλόνοτοιο ὄφιν 4.249)*64」としている。しかし、アポロニオスはアンティマコス*65と同様に、イアソンによる大蛇の殺害を描かない*66。そして黄金の羊毛を奪う様子は、以下のように語られる。

*60 ただし、ここでイアソンは帰国後の婚姻を誓っているが、しかし実際には帰国の途中で婚姻を行うことになる (4.1128-200) ため、ここでイアソンが述べた言葉は正確には実現されない。

*61 Hunter (2015) 101 on Arg. 4.145-66.

*62 FGrHist 3, F31.

*63 FGrHist 31, F52.

*64 本文の底本は Race (1997) を用いた。

*65 Lyde, fr. 63W. = 73M.

*66 ただし、Hunter (2015: 101 on Arg. 4.145-66) は、アンティマコスのみがアポロニオスに先立って大蛇を殺さない伝承を描いたわけではないだろうと考えている。

ἔνθα δ' ὁ μὲν χρύσειον ἀπὸ δρυὸς αἶνυτο κῶας,
 κούρης κεκλομένης, ἣ δ' ἔμπεδον ἔστηνυῖα
 φαρμάκῳ ἔψηχεν θηρὸς κάρη, εἰσόκε δὴ μιν
 αὐτὸς ἔην ἐπὶ νῆα παλιντροπάασθαι Ἴησων
 ἦνωγεν· λέειπεν δὲ πολύσκιον ἄλσος Ἄρηος. (Arg. 4.162-6)

するとその者（イアソン）はそこで木から黄金の羊毛を取りにか
 かった、
 娘（メデシア）の促しにより。彼女（メデシア）はじつと立ち、
 薬を用いて獣の頭を撫でた。するとようやく彼女（メデシア）に
 イアソン自身が、船へ引き返すことを
 命じた。そしてアレスの薄暗い森を去った。

ここでイアソンは、「娘の促しによって（κούρης κεκλομένης 4.163）」黄金の
 羊毛を手に入れる。この時点まで、イアソンはメデシアによって導かれている。
 Hunter は、最後に「命じた（ἦνωγεν 4.166）」と語られることで、イア
 ソンが主導権を取り戻していると指摘する^{*67}。よって、黄金の羊毛を手に入
 れる場面において、より重きを置かれるのはメデシアの活躍を語ることであ
 り、それに伴いイアソンが果たす役割は限定的となっていることが分かる。

黄金の羊毛を手に入れたイアソンの喜びは、以下のように表現されている。

ὥς δὲ σεληναίης διχομήνιδα παρθένος αἶγλην
 ὑψόθεν ἐξανέχουσιν ὑπωροφίου θαλάμοιο
 λεπταλέῳ ἐανῶ ὑποίσχεται, ἐν δέ οἱ ἦτορ
 χαίρει δερκομένης καλὸν σέλας· ὥς τότε Ἴησων
 γηθόσυνος μέγα κῶας εἰς ἀναείρετο χερσίν,
 καὶ οἱ ἐπὶ ξανθῇσι παρήσιον ἦδ' ἐμετώπῳ
 μαρμαρυγῇ ληνέων φλογὶ εἵκελον ἵζεν ἔρευθος. (Arg. 4.167-73)

まるで娘が、屋根の下の部屋から、
 高く昇り輝く満月の光を、

^{*67} Hunter (2015) 104 on Arg. 4.166.

薄い衣を掲げて受けとめ、そしてその胸において
 美しい輝きを見て喜ぶかのように、そのようにイアソンはその時
 喜び、大きな羊毛を彼の両手で掲げると、
 すると彼の黄金の額と頬に、
 羊毛の煌めく炎のような輝きによって、そのような赤みがさした。

ここでは、黄金の羊毛を掲げその輝きを受けるイアソンの姿が、衣を掲げて月明かりを受ける娘の姿に喩えられる。これは、Hunterにより、英雄の行為を女性と比較して喩えるという比喩表現はホメロスにおいても見られるが、特に月明かりを浴びる娘の姿に喩えられるという点では、アポロニオスによる極めて独創的な表現であると指摘されている^{*68}。ただし、黄金の羊毛の輝きが月の光に喩えられるということは、『イリアス』19.374において、アキレウスの盾の輝きが月の光に喩えられたことを想起させる^{*69}。この比喩表現は、おそらく本叙事詩において、イアソンが女性たちの前に姿を表す際、その姿が繰り返し輝く星に喩えられてきた（I.774-8I, 3.956-6I）こととも無関係ではないだろう。Knightは、さらにこの比喩表現とエウリピデス『メデイア』の比較を行い、ここで衣服（ウエディングドレスとも解釈され得る）を掲げる娘の姿がエウリピデス『メデイア』におけるメデイアの姿と重なることで、アポロニオスはイアソンとメデイアの婚姻が幸せでないことを示唆するのだと主張する^{*70}。このように、この比喩表現から推察しうる複数の事柄は、いずれもイアソンが女性たちによる助力を受けてこの羊毛を手に入れたということを効果的に演出し、同時にその後待ち受ける、恋の破滅をも示唆している可能性がある。

以上のことから、イアソンが黄金の羊毛を手に入れるまでの一連の描写に

^{*68} Hunter (2015: 104 on *Arg.* 4.167-70) によると、例えば、『イリアス』16.7-10 においては、アキレウスの隣にやってきて泣くパトロクロスが、母に縋り泣く娘に喩えられている。

^{*69} Knight (1995) 109.

^{*70} Knight (1995) 248-250.

において、アポロニオスは、女性たちによる助力により焦点が当たるように物語を語っていることがわかる。そして、『オデュッセイア』における招魂の場面（10.516-40, 11.23-50）をモデルとした場面を描いたり、『イリアス』においても用いられている比喩を用いたり、ホメロス作品に対する模倣やほのめかしの可能性は指摘し得るものの、いずれにおいても、女性たちとの関係性により明確に焦点が当たるように改変が加えられていることが確認できる。

3.4 メデиаの逃走とアルゴ船の帰国

黄金の羊毛を手に入れたイアソンは、メデиаを乗せて、アルゴ船を帰路に着かせる。しかし、彼らを武装したアイエテスらが追う（4.212-40）。帰路を進む中、このコルクス人らの追手が海への航路を塞いでいる島々に至ったアルゴナウタイは、自分達が敗れることがないように、戦いを交えないことを選ぶ。このことは、以下のように語られる。

ἐνθα κε λευγαλέη Μινύαι τότε δημοτῆτι
 παυρότεροι πλεόνεσσιν ὑπέικαθον, ἀλλὰ πάροιθεν
 συνθεσίην, μέγα νείκος ἀλευάμενοι, ἐτάμοντο·
 κῶας μὲν χρύσειον, ἐπεὶ σφισιν αὐτὸς ὑπέστη
 Αἰήτης, εἰ κείνοι ἀναπλήσειαν ἀέθλους,
 ἔμπεδον εὐδικίῃ σφέας ἐξέμεν, εἴτε δόλοισιν
 εἴτε καὶ ἀμφαδίην αὐτως ἀέκοντος ἀπηύρων· (Arg. 4.338-44)

その時その場所で、悲しき戦いにより、
 多勢に無勢のミニュアイ（＝アルゴナウタイ）は敗れただろう。だが
 その前に、
 彼ら（アルゴナウタイ）は大きな戦いを避けるため、取り決めを結
 んだ。

一方で、黄金の羊毛は、アイエテス自身が彼らに約束したので、
 彼らが試練を成し遂げた場合に、
 ずっと正当に彼らのところにあるだろう、彼らが騙したのであっても、

また彼らが不本意な者から公然と奪い取ったのであっても。

ここでアポロニオスは、イアソンが黄金の羊毛を手に入れる権利を持っていたのにもかかわらず、結果的に騙し、奪いとることでそれを手に入れていることを示す。しかし取り決めが結ばれたことにより、試練を達成したイアソンが黄金の羊毛を盗んだことには問題がなくなり、祖国を裏切ったメデИАをめぐり、争いが起こっていることとなる。

この取り決めを結ぶということは、第一歌の指導者選出の場面で、指導者が行うべきこととしてイアソンが言及したこと (I.339-40)^{*71} である。選出の場面でイアソンは、仲間たちに指導者を自ら選ぶようにと述べ、その指導者が行うこととして、異国の者たちのところで戦うことや取り決めを結ぶことを取り仕切るのだと告げている。つまり、第四歌において、アルゴナウタイの指導者たるイアソンが異国の者であるコルクス人との間に取り決めを結び、戦を回避するということは、第一歌において自らの言葉で述べた指導者としての務めを、実践しているということであり、このこと自体は、驚ろかされるようなことではない。

しかし、ここで問題となるのはメデИАの立場であり、取り決めが結ばれたことが語られた後、メデИАは自らが一人置き去られることを恐れ、イアソンを呼び出して、婚姻の誓いに対する裏切りを責め、悲嘆の言葉を述べる (4.355-90)。このメデИАの様子と、イアソンの反応は以下のように描写される。

ἵετο δ' ἥ γε

νῆα καταφλέξει διά τ' ἔμπεδα πάντα κεάσσαι,
 ἐν δὲ πεσεῖν αὐτῇ μαλερῶ πυρί. τοῖα δ' Ἰήσων
 μευλιχίοις ἐπέεσσιν ὑποδδείσας προσέειπεν
 “ἴσχεο, δαυμονίη” (Arg. 4.391-5)

^{*71} イアソンはメデИАを巡る取引において「συνθεσία (取り決め)」を繰り返して結んでいる。この語が具体的にどの場面での形で用いられているのかについては、Clauss (1997: 174) が挙げている。

すると彼女（メデイア）は勇んだ、
 船を燃やし、全て残さず破壊し尽くし、
 そして自分自身は燃え上がる炎の中へと落ちると。するとこれをイア
 ソンは
 恐れて、穏やかな言葉で語りかけた。
 「哀れな者よ、やめてくれ。」

ここでイアソンは、メデイアの感情を落ち着かせるために「穏やかな言葉で (μειλιχίους ἐπέεσσιν 4.394)」声をかけるという態度を見せていて、自らの目的のために女性に声をかけるという態度は、『オデュッセイア』第六歌におけるオデュッセウスのナウシカに対する態度と共通する。『オデュッセイア』第六歌においても、オデュッセイアがナウシカに発する言葉は、「穏やかな言葉で (ἐπέεσσιν ... μειλιχίουςιν 6.143)」⁷²「彼は穏やかで思慮深い言葉で述べた (μειλίχιον καὶ κερδαλέον φάτο μῦθον 6.148)」と、形容詞「μειλίχιος」を用いて表現されている。加えて、『アルゴナウティカ』においてイアソンは帰国のために女性（メデイア）の怒りを収める必要があり、『オデュッセイア』においても、帰国のためにオデュッセウスは女性（ナウシカ）を怒らせないように振る舞おうと気にかけているという点でも類似する。

また、イアソンが最初に発する「哀れな者よ (δαμονίη 4.395)」という呼びかけは、初めての面会において、イアソンがメデイアに対して婚姻を誓った際の言葉 (3.1120) と、また先述した 4.95 においてアイエテスのもとから逃げ出したメデイアに対して再度婚姻を誓った時の言葉と同じである^{*72}。ここでイアソンは、自分の誓いを疑い、悲嘆するメデイアに対して、過去の自分の言葉を思い起こさせる言葉を用いて、穏やかに語りかけ、宥めようとしている。このイアソンの態度からは、メデイアに対して恐怖を抱いたのにもかかわらず、メデイアとは対照的に思慮深く発言している様子が伺えると考える。

*72 これに関しては堀川 (2019: 276) が指摘している。

イアソンはメデイアに対して、戦いを遅らせるための時間稼ぎに取り決めに結んだのであり、指揮官であるメデイアの兄（アプシュルトス）を殺害するという戦略を実施し、メデイアを取り返すために向かってくるコルキス人と正面から戦うつもりであるということを告げる（4.395–409）。この発言では、イアソンが最初からアプシュルトスの殺害を計画していたのか、あるいはメデイアの言葉を踏まえてこのように述べたのかという疑問が残る。Fränkel は、取り決めに戦いを遅らせるためであるという発言も含めて、メデイアの恐ろしい行為を宥めるためにイアソンが咄嗟に述べたことであると指摘している^{*73}。Beye はこの考えをやや緩和させ、イアソン自身が述べているように、取り決めの狙いは単に時間を稼ぐことにあったが、メデイアの怒りが彼にアプシュルトス殺害という戦略を語らせたのだと指摘した^{*74}。Byre は、ここで詩人はわざとイアソンは本当に述べたような戦略を最初から考えていたのか、それともメデイアが彼を責めた通り、裏切るつもりであつたのかを明らかにしていないのだと指摘する^{*75}。Natzel は、「イアソンの返答には未曾有の狡猾さがある^{*76}」と述べている。曰く、イアソンは現在の状況の責任をメデイア存在に帰し、自らの偽りのもくろみに従い、取り決めを守らないことでメデイアを落ち着かせている。

イアソンが相手の感情を落ち着かせるためにこの言葉を述べているということ踏まえれば、この返答にもまた、Natzel に言わせれば狡猾であるとも捉えられる、イアソンの思慮深さが表れていると解釈することが良いだろう。イアソンがアプシュルトス殺害を最初から計画していたのか、それともメデイアの言葉を受けて咄嗟に述べたのかということは、このイアソンの思慮深さを考えるにあたり、おそらくそれほど重要ではない。ここでイアソンは、動詞 ὑποδεῖω のアオリスト分詞男性単数主格形「ὑποδεδείσας」を用いることで、メデイアに対して恐れを抱いていることが表現されているが、この

*73 Fränkel (1968) 484–5 on Arg. 4.394–410.

*74 Beye (1982) 162.

*75 Byre (2002) 121.

*76 Natzel (1992) 100–1: 'Iasons Antwort ist von beispielloser Verschlagenheit'.

分詞は理由を表して用いられているのではなく、時間を表していると読むと考える。つまり、本場面において明らかに言えるのは、イアソンはメデイアに対して恐れを抱いたが、彼女を落ち着かせるために思慮深い返答をしたということである。

こうしてアルゴ船に乗船することになったメデイアは、帰路においても重要な役割を果たしていくことになる。英雄ではなく、女性であるメデイアに焦点が当たる描き方がされ続けることは、ホメロス作品と異なる点であると言えるだろう。

まず、メデイアの計略に従いアプシュルトスら一行を殺害したイアソンとアルゴナウタイは、帰国のために集会を開く。ここでは、「そして娘は、相談している彼ら（アルゴナウタイ）のところにやってきた（ἐπὶ δὲ σφίσιν ἦλυθε κοῦρη | φραζομένης. 4.493-4）」とされ、メデイアもまた英雄たちの集会に参加している。

また、帰国の途中、カルパトスにおいて、アルゴ船が港へ停泊しようとし、青銅の男タロスによって阻まれた際（4.1637-50）、メデイアはアルゴナウタイを助ける。メデイアは後退しようとするアルゴナウタイに声をかけ、タロスを従えることを試みている間、岩による攻撃が届かない場所にいることを薦める（4.1651-8）。メデイアが歌を歌いタロスを従える間、イアソンが果たした役割は、メデイアの手を握り連れて行くことのみである（4.1663-4）。これについて、Mori は、ここでメデイアが果たす役割の大きさから、彼女は「政治交渉のための人質ではなく、その意志に反して盗まれた花嫁でもなく、彼女自身がアルゴナウタイの一員である^{*77}」と述べている^{*78}。ここでタロスは、英雄の時代にとって代わることになる、身体的な暴力を抛り所とする青銅時代（ヘシオドス『仕事と日』143-72）を象徴しているとする解釈が

^{*77} Mori (2008) 126: 'neither a pawn in political negotiation, nor a hapless bride stolen against her will, but an Argonaut in her own right'.

^{*78} 同様のことは、DeForest (1994: 107-24) によっても指摘されている。

ある*79。Stürner は、もしこのタロスに対する勝利を、過去の時代からギリシア文化への移行などとして捉えるならば、タロスはアルゴナウタイ自身によって征服される必要があったと指摘する*80。しかしここでは、コルキス人でアジアの魔女であるメデиаがタロスを倒すということは、より高次に、エジプトにあるギリシア文化とコルキスの諸都市の文化が共通のルーツを持つことを主張しているのかもしれないと読まれる*81。これに加えて、Stürner は、メデиаがリビアとヨーロッパの境界に位置するクレタ島で、誰からも助言を得ずに最初の敵を倒したということは、『アルゴナウティカ』では語られない、メデиаの神話上の行いを示唆している可能性もあると指摘している*82。

このようにアポロニオスは、帰路においてメデиаをアルゴナウタイの一員として活躍させることで、メデиаという題材が持つ、本叙事詩では直接語ることのない物語をほのめかす。そしてこのほのめかしを効果的に提示するためには、イアソンが果たす役割は限定的とならざるを得なかったと考えられる。

4 おわりに

本稿においては、ヒュプシピュレとメデиаに対するイアソンを描写するにあたり、ホメロスにおける語彙や表現をどのように利用しているのかを論じた。いずれの場面においても、アポロニオスは自らに好意を寄せる女性たちに対するイアソンを描写するに当たって、その美しさと、相手の感情を落ち着かせる、ナウシカに対するオデュッセウスを思わせる思慮深さを持ち合わせた英雄として、イアソンを位置付けた。そして彼の美しさを描写するために、『イリアス』においては戦場で用いられる表現を女性と対面する場面で用いることで、英雄たちが女性と交渉するということが、彼らが直面する

*79 Hunter (1993) 166–9, Knight (1995) 139–40.

*80 Stürner (2022) 343–4.

*81 Stephens (2003) 175.

*82 Stürner (2022) 344.

困難の一つであると示された。

この困難に対して、ヒュプシピュレの場合は、イアソンは一人で立ち向かうのではなく、ヘラクレスという英雄の存在により、長い間留まることなく冒険を再開することができた。これは、ヘラクレスという題材に焦点が当てられた結果であると考えられる。そしてメデイアの場合は、イアソンは自らの目的のために、穏やかな言葉をかけて相手の感情を宥めるという思慮深さを見せる。彼は策略通りにメデイアの助けを得て黄金の羊毛を手に入れ、アルゴナウタイに加わったメデイアは、アルゴナウタイをタロスの危機から救う。ここでは、メデイアという人物の神話上の立ち位置に焦点が当てられ、何らかの象徴性が与えられている可能性がある。ここから、アポロニオスはヘラクレスやメデイアといったギリシア文学の伝統において長く語られてきた登場人物を、『アルゴナウティカ』では直接語ることをしないその登場人物の抱える伝承を思わせる形で描写しており、それが結果的に、イアソンの果たす役割を減らしているのではないかと考えられる。

女性たちに対するイアソンの行為は、ホメロス作品における英雄たちの行為（特にオデュッセウス）との類似性が高いため、その点から、イアソンの人物造形に、ホメロス作品との大きな乖離は認められない。彼は、あくまでもホメロスが描いた英雄社会と同様の枠組みの中で活躍する英雄である。女性たちを魅了する美しさと、魅了した女性たちから助けを得るということは、イアソンの人物造形のみに当てはまる特色とは言い難い。しかし、アポロニオスはホメロス作品などにおいて描かれてきた事柄を踏まえて、それらをほのめかすように詩行を書くことで、異性愛が叙事詩の中で果たす役割や、感情を落ち着かせようとする英雄の思慮深さの重要性を、より明確に示すことに成功している。そのような特色ある叙述の中で、イアソンが果たす役割は主に女性に対することに限定され、またメデイアやヘラクレスといった他の人物の物語のほのめかしに伴い、彼が冒険で果たす役割が少なくなったことが、イアソンの人物造形をホメロス作品の英雄たちと同等とみなすことを難しくした。しかし、それは英雄イアソンの人物造形が彼らと乖離することを意味してはいないと思う。

略号一覧

- FGrHist** F. Jacoby (ed.), *Die Fragmente der Griechischen Historiker*, Erster Teil: *Genealogie und Mythographie*, A and a (Leiden: E. J. Brill, 1968).
- LSJ** H. G. Liddell and R. Scott (eds.), *A Greek-English Lexicon*, revised by H. S. Jones (9th edn., Oxford: Clarendon Press, 1940).

参考文献一覧

I 校訂・注釈・邦訳

- Campbell, A. (1983). *Index Verborum in Apollonium Rhodium*, Hildesheim / Zürich / New York: Georg Olms.
- (1994). *A Commentary on Apollonius Rhodius III 1–471*, Leiden: E. J. Brill.
- Fränkel, H. (1968). *Noten zu den Argonautika des Apollonios*, München: C. H. Beck.
- Gillies, M. M. (1979). *The Argonautica of Apollonius Rhodius: Book III*, New York: Arno Press.
- Hunter, R. (1989). *Apollonius of Rhodes: Argonautica, Book III*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (2015). *Apollonius of Rhodes: Argonautica, Book IV*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Jacoby, F. (1968a). *Die Fragmente der Griechischen Historiker (= FGrHist): Erster Teil: Genealogie und Mythographie, A: Vorrede. Text. Addenda. Konkordanz*, Leiden: E. J. Brill.
- (1968b). *Die Fragmente der Griechischen Historiker (= FGrHist): Erster Teil: Genealogie und Mythographie, a: Kommentar. Nachträge*, Leiden: E. J. Brill.
- Marchant, E. C., and Todd, O. J. (1992). *Xenophon: Memorabilia, Oeconomicus, Symposium, Apology*, Cambridge, Mass. / London: Harvard University Press.
- Matthews, V. J. (1996). *Antimachus of Colophon: Text and Commentary*, Leiden: E. J. Brill.
- Race, W. H. (1997). *Pindar, I: Olympian Odes, Pythian Odes*, Loeb Classical Library, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- (2008). *Apollonius Rhodius: Argonautica*, Loeb Classical Library, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Stürner, S. (2022). *Die Argonauten in Afrika. Einleitung, Übersetzung und Kommentar zur Libyenepisode des Argonautika des Apollonios von Rhodos (A. R. 4, 1223–1781)*, Berlin: De Gruyter.

- Tsagalis, C. (2022). *Early Greek Epic Fragments, II: Epics on Herakles, Kreophylos and Peisandros*, Berlin: De Gruyter.
- Wendel, C. (1974). *Scholia in Apollonium Rhodium Vetera*, 3rd edn. (1st edn. 1935), Berolini: Apud Weidmannos.
- West, M. L. (1998–2000). *Homeri Ilias*, 2 vols., Stuttgartiae: Teubner.
- (2003). *Greek Epic Fragments*, Loeb Classical Library, Cambridge, Mass. / London: Harvard University Press.
- (2017). *Homerus: Odyssea*, Berlin: De Gruyter.
- Wyatt, W. F. (1999). *Homer: Iliad, Books 13–24*, Loeb Classical Library, 2nd edn. (1st edn. by A. T. Murray, 1925), Cambridge, Mass. / London: Harvard University Press.
- Wyss, B. (1974). *Antimachi Colophonii Reliquiae*, 2nd edn. (1st edn. 1936), Berlin: Apud Weidmannos.

- 内田次信訳 (2001). 『ピンダロス (著)：祝勝歌集・断片集』, 西洋古典叢書, 京都大学学術出版会.
- 岡道男訳 (1997). 『アポロニオス・ロディオス (著)：アルゴナウティカ——アルゴ船物語——』, 講談社文芸文庫, 講談社.
- 佐々木理訳 (1953). 『クセノフォーン (著)：ソクラテースの思い出』, 岩波文庫, 岩波書店.
- 中務哲郎訳 (2020). 『ホメロス外典／叙事詩逸文集』, 西洋古典叢書, 京都大学学術出版会.
- 堀川宏訳 (2019). 『アポロニオス・ロディオス (著)：アルゴナウティカ』, 西洋古典叢書, 京都大学学術出版会.
- 松平千秋訳 (1992). 『ホメロス (著)：イリアス』, 岩波文庫, 上・下, 岩波書店.
- 訳 (1994). 『ホメロス (著)：オデュッセイア』, 岩波文庫, 上・下, 岩波書店.

2 研究

- Beye, C. R. (1969). 'Jason as Love-hero in Apollonios' Argonautika', *Greek, Roman and Byzantine Studies* 10.1: 31–55.

- Beye, C. R. (1982). *Epic and Romance in the Argonautica of Apollonius*, Carbondale: Southern Illinois University Press.
- Byre, C. S. (2002). *A Reading of Apollonius Rhodius' Argonautica—The Poetics of Uncertainty*, Lewiston / New York: Edwin Mellen.
- Carspecken, J. F. (1952). 'Apollonius Rhodius and the Homeric Epic', *Yale Classical Studies* 13: 33–143.
- Clare, R. J. (2002). *The Path of the Argo*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Clauss, J. J. (1993). *The Best of the Argonauts*, Berkeley / Los Angeles / Oxford: University of California Press.
- (1997). 'Conquest of the Mephistophelian Nausicaa: Medea's Role in Apollonius' Redefinition of the Epic Hero', in: J. J. Clauss and S. I. Johnston (eds.). *MEDEA: Essays on Medea in Myth, Literature, Philosophy, and Art*, Princeton: Princeton University Press, 149–77.
- DeForest, M. M. (1994). *Apollonius' Argonautica: A Callimachean Epic*, Leiden: E. J. Brill.
- Diggle, J., Fraser, B. L., James, P., Simkin, O. B., Thompson, A. A., and Westripp, S. J. (2021). *The Cambridge Greek Lexicon*, 2 vols., Cambridge: Cambridge University Press.
- Fränkel, H. (1957). 'Das Argonautenepos des Apollonios', *Museum Helveticum* 14: 1–19.
- (1960). 'Ein Don Quijote unter den Argonauten des Apollonios', *Museum Helveticum* 17: 1–20.
- Galinsky, G. K. (1972). *The Herakles Theme: The Adaptation of the Hero in Literature from Homer to the Twentieth Century*, Oxford: Basil Blackwell.
- Glei, R. F. (2001). 'Outlines of Apollonian Scholarship', in: T. D. Papanghelis and A. Rengakos (eds.), *A Companion to Apollonius Rhodius*, Leiden: Brill, 1–26.
- Hunter, R. (1988). 'Short on Heroics: Jason in the Argonautica', *Classical Quarterly* 38: 436–53.
- (1993). *The Argonautica of Apollonius: Literary Studies*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Klein, T. M. (1983). 'Apollonius' Jason, Hero and Scoundrel', *Quaderni Urbinati di Cultura Classica* 42, 115–26.
- Koopman, N. (2018) *Ancient Greek Ekphrasis: Between Description and Narration: Five Linguistic and Narratological Case Studies*, Leiden: Brill.
- Knight, V. (1995). *The Renewal of Epic: Responses to Homer in the Argonautica of Apollonius*, Leiden: E. J. Brill.
- Lawall, G. (1966). 'Apollonius' Argonautica: Jason as Anti-Hero', *Yale Classical Studies* 19: 119–69.

- Margolies, M. M. (1981). *Apollonius' Argonautica: A Callimachean Epic*, The University of Colorado, Ph.D. thesis.
- Mori, A. (2008). *The Politics of Apollonius Rhodius' Argonautica*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Nagy, G. (1979). *The Best of the Achaeans: Concepts of the hero in Archaic Greek Poetry*, Johns Hopkins Paperbacks edn. (1981), Baltimore / London: The Johns Hopkins University Press.
- Natzel, S. A. (1992). *Κλέα γυναικῶν. Frauen in den Argonautica des Apollonios Rhodios*, Trier: Wissenschaftlicher Verlag.
- Pfeiffer, R. (1968). *History of Classical Scholarship: From the Beginning to the End of the Hellenistic Age*, Oxford: Oxford University Press.
- Phillips, T. (2020). *Untimely Epic: Apollonius Rhodius' Argonautica*, Oxford: Oxford University Press.
- Pietsch, C. (1999). *Die Argonautika des Apollonios von Rhodos: Untersuchungen zum Problem der einheitlichen Konzeption des Inhalts*, Stuttgart: Franz Steiner.
- Schapiro, H. A. (1980). 'Jason's Cloak', *Transactions of the American Philological Association* 110: 263–86.
- Schwinge, E. R. (1986). *Künstlichkeit von Kunst: Zur Geschichtlichkeit der alexandrinischen Poesie*, München: C. H. Beck.
- Stephens, S. A. (2003). *Seeing Double: Intercultural Poetics in Ptolemaic Alexandria*, Berkeley: University of California Press.
- Wilkins, E. G. (1920). 'A Classification of the Similes of Homer', *Classical Weekly* 13 (19): 147–50.
- Zanker, G. (1979). 'The Love Theme in Apollonius Rhodius' *Argonautica*', *Wiener Studien* 92: 52–75.

久保正彰 (1992). 『ギリシャ・ラテン文学研究』, 岩波書店.